



日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

1994年3月31日

AJEL

No. 48

1. 会則・理事選挙規則の改正案
2. 第15回定期大会プログラム
3. 理事会報告
4. 研究部会報告
5. 学術・文化情報
6. 近着会員業績
7. 事務局から

1. 会則・理事選挙規則の改正案

小委員会がまとめる

投票は6名連記で地域性を加味

懸案となってきたラテンアメリカ学会会則および理事選挙規則の改正について、これまで数次にわたり理事会および理事会から委嘱された理事3名、運営委員3名からなる規約等検討小委員会で検討を重ねてきた結果、次のような理由で理事定数の増加をはかり、同時に選挙方法の若干の手直しをすることが望ましいとの結論に達した。以下は理事会で合意を見た会則・理事選挙規則の改正案とその趣旨であるが、この問題に関する会員諸氏のご意見をお寄せ下さい。

○会則改正案

第12条（役員）－（㊦）理事 15名以内。

（従来は10名以内）

第14条（役員の任期）－ 役員の任期は2年と

し、連続2期を限度とする。連続2期

役員を経験したものは、次の2期被選

挙権を失う。（下線部分追加、下線部

以外は文章短縮）

○理事選挙規則改正案

第4条（選挙の方法）－ 2 投票は、無記名

秘密投票とし、所定の投票用紙を用い

る。（以下抹消）

3（新設）投票は6名連記とする。この

うち3名は東日本（新潟・群馬・山梨

学会にロゴがお目見え

レターヘッドなどに利用へ

作成作業が進められてきた学会のロゴがこのほど完成し、1月22日開催の理事会で決定、本誌タイトルにみられるように、早速、本会報から利用することになった。

ロゴは、アメリカ大陸の先住民からモチーフを取ったもので、筑波大学芸術学系の外国人教師 Rodney Milius氏の手によるもの。「少々恐い感じもするが、ラテンアメリカ研究に果敢に挑む学会員の姿勢にピッタリ」といった意見が理事会では表明された。オフィシャルなロゴは顔が右向きだが、利用する場所によっては左向きも使うことにした。

ロゴにあるAJELは、Asociación Japonesa de Estudios Latinoamericanosの略で、学会ではロゴを印刷したレターヘッドを準備する予定にしている。

ロゴを作成したMilius氏は、カンタス航空の尾翼デザインやブルームスデイ書店のロゴなどを作成したことのある英国の新進デザイナーで、ヨーロッパで数回受賞している。

・神奈川（東）・中部日本（長野・静岡・富山・石川・岐阜・愛知・三重）

・西日本（福井・滋賀・奈良・和歌山以西）の3地域ブロックの被選挙権者

から各1名を記入し、残る3名はブロックにかかわらず自由に記入する。

（従来の3、4、5項はそれぞれ、4、5、6項となる。）

○会則・理事選挙規則改正の趣旨

1. 本学会の理事も現在通算7期目を数えるが、ここへきて理事の地域的偏りが顕著なものとなってきた。本学会が全国的な組織で

ある以上、理事が特定地域にのみ集中するのは本意とするところではなく、なるべく各地域間のバランスのとれた理事会構成にすることが望ましい。その意味で、上記のような選挙規則の改正によって理事の地域的偏りはかなりの程度解消されるものと考えられる。また同時に、これによって理事の所属機関の偏りも必然的に解消されるであろう。

2. 本学会は発足して13年になるが、発足時1980年の会員数160名に対し、93年現在では408名と、会員数が約2.5倍に増えている。こうした会員数の増加と学会活動の多様化にともない、理事の事務負担が過重なものとなってきている。今回の会則改正の狙いは、13年間据え置かれてきた理事定数を増やすことによって理事の仕事の過重負担を解消するという量的な側面だけではなく、若手研究者の増大に対応した学会執行部の若返りをはかるという質的な側面も合わせ持つものである。

3. なお、監事の選出方法に関しては、とりあえず今回は変更する必要なしとの結論に達したが、近い将来必要があれば再検討の機会を設ける。

4. 新しい会則と理事選挙規則は、承認されれば1996年度から実施するものとする。

(規約等検討小委員会委員長 中川和彦)

○意見の送付先

小委員会委員 二村久則

住所 瀬戸市柳ヶ坪町98-2

電話 0561-84-9641

FAX (名古屋大学言語学文化部)

052-782-8261

2. 定期大会に活発な発表応募 8分科会で28の研究報告

日本ラテンアメリカ学会第15回定期大会が6月11、12日(土、日)の両日、名古屋市の愛知県立大学(JR名古屋駅より地下鉄桜通線で「瑞穂区役所」下車)を会場に開催される。大会組織委員会(稲村哲也委員長)では、このほど大会プログラムの大筋について原案を作成した。理事会で詳細をつめたうえ、近く正式決定される見込み。

今回は若手からベテランにいたるまで、自然科学系を含めて幅広い分野から多数の報告希望が寄せられ、分科会構成や日程調整に苦労するほどであった。8つの分科会で合計28

の研究報告が行われる予定であり、これは上智大学で開催された昨年の大会(6分科会、23研究報告)を上回る規模である。外部から講師を招いての記念講演やシンポジウムも例年通り開催される。今年は2年に1度の理事改選の年でもあり、組織委員会では多数の会員の参加を期待している。プログラム概要は以下の通り。

○11日(土)

正午ごろ受付開始。1時10分から記念講演(講師は現在調整中)。2時半から4時半まで、第1日分科会(1. 自由論題 2. ラテンアメリカ近現代史の諸相 3. 国際経済とラテンアメリカ 4. ペルーの文学・思想) 4時40分より総会。6時より懇親会。

○12日(日)

10時より12時半まで、第2日分科会(5. 経済自由化の諸側面 6. 先住民社会における時間と空間 7. 中米・カリブの現代政治 8. メキシコの文化・思想)。

1時半から4時半までシンポジウム(テーマはラテンアメリカの都市における諸問題について)。

詳細は5月初旬をメドに発送予定の大会プログラムを参照してほしい。問い合わせは、〒467 名古屋市長郷区高田町3-28 愛知県立大学外国語学部 小池康弘研究室内「学会組織委員会」へ。電話052-851-2191 内線326(研究室)または328(外語センター)、FAX. 052-851-3255。総会欠席の方は委任状の発送をお忘れなく。

(大会組織委員会)

訂正 会報47号(1993年11月21日付け)で今名古屋大会は中部地域で2度目と報じましたが、3度目の間違いでした。

3. 理事会報告

○第65回理事会報告

日時:1994年1月22日(土)

場所:上智大学

出席者:山田、アンドラーデ、石井、堀坂、二村、三田、高橋(書記)(欠席:加茂、中川、大貫)

1. 次回大会準備

1) 1月10日までの報告希望は5件。再募集するとともに委員会から報告依頼することとした。

2) 記念講演者についてはさらに検討を重

ね早急に決定することとした。

2. 会則・理事選挙規則の改正案について
小委員会より、①理事の地域的な偏りを是正し、②学会執行部の若返り・活発化を期待し、③会員数の増加の著しい増加にかんがみて、規約改正案が提出され、了承した。（「1. 会則・理事選挙規則の改正案」を参照）

3. 各委員会報告

- 1) 研究会は東部研究部会を2月26日、中部研究部会を3月5日、西部研究部会を3月26日に開催予定。大会ミニシンポに発展させるテーマ「地域統合と中南米」「国際秩序再編成の中の中南米」などを検討中。
2) 年報は投稿申し込み10篇のうち9篇が到善し1月末/切で審査中である。書評依頼5点中3点が到着した。他に依頼原稿1点、記念講演を掲載の予定。
3) FIEALCの大会が94年6月に台湾で開催されることとなった。以前から日本で開催したいとの希望あり。

4. 名簿作成について

データ収集をほぼ完了し、未提出者に葉書で催促中。

5. ロゴについて

デザイナーからロゴ原案とレターヘッド原案の修正最終版が提出され決定。

6. 日本学術会議会員推薦人選出について

当学会は日本学術会議の登録学会であるため、同会議会員の選挙権（歴史学1票、政治学2票）があり、権利を行使することが望ましいので、会員候補として歴史学加茂理事、政治学松下洋会員、推薦人として歴史学山田理事長（予備者高橋理事）、政治学アンドラーデ、中川両理事（予備者二村理事）に委嘱することを決定。

○学会の事務局が移転します

山田理事長の移籍にともない学会事務局が筑波大学内から南山大学内に変ります。新しい住所は以下のとおりです。
〒466 名古屋市昭和区山里町18番地
南山大学外国語学部イスパニヤ科
山田睦男研究室内
日本ラテンアメリカ学会事務局
電話 052-832-3111

7. その他の事項

- 1) 日本学術振興会のサンパウロ研究連絡センター長の公募が行われるにあたり、選考に当学会も協力することを了承した。
2) 山田理事長の転職に伴い、4月から事務局を南山大学に移転することが報告された。
8. 新入会員4名、退会会員1名を承認。

4. 研究部会報告

○中部日本部会

1994年春の中部研究部会は、3月5日午後2時30分から南山大学で開催された。当日は15名の出席を得て、2つの報告とそれに関する質疑応答、ディスカッションなどが熱心に行われ、午後6時すぎに散会した。各報告の要旨は以下のとおりである。

○第1報告：米国におけるラテンアメリカ系移民に対する二言語二文化教育

牛田千鶴（鈴鹿国際大学）

1960年代半ば、黒人による公民権運動に触発されたラテンアメリカ系住民は、二言語教育を要求して運動を開始した。68年に成立した二言語教育法は、74年、78年の修正を経て、「英語力が不十分な生徒のための救済措置」から「母語による民族文化の教育の保証」へと実質的に変化していった。しかしながら80年代以降、主流文化の側、つまり白人社会の保守化傾向が強まるとともに、二言語・二文化教育およびその背景にある文化的多元主義が批判を浴びるようになってきた。

ラテンアメリカ系住民は、21世紀の米国において最大のマイノリティ集団になると予測されている。彼らを主な対象としてきた二言語・二文化教育の今後は、多民族国家米国がどのような形での国家統合をめざすのかにかかっている。主流文化を含むすべての文化において「異質であること」と「平等であること」が両立し得るような文化的多元主義を確立できるのか、それとも同化主義の復活となるのか……。90年代は米社会にとってまさに正念場であるといえよう。

○第2報告：戦間期アルゼンチンの食肉輸出と牧畜業保護政策

榎股一索（名古屋大学大学院）

本報告では、戦間期のアルゼンチンで実施

された牧畜保護政策を分析した。

まず戦間期を通じて食肉加工・輸出業に見られた構造的特徴を整理した。アルゼンチンの食肉加工・輸出業は、少数の外国企業によってその基礎が確立され、アルゼンチンの牧畜業者に不利な家畜売買の関係が形成された。

次に戦間期を1920年代と30年代に分け、各時期にアルゼンチンの牧畜業者が直面した危機、すなわち家畜価格下落の実態を捉え、その対策としての牧畜業保護政策を整理した。

この政策はミート・パッキング会社の家畜購入活動の規制が中心であった。また20年代の政策はあくまでもミート・パッキング会社の活動規制が中心であったのに対し、30年代の政策は、牧畜業者主体の組合組織を設立し、直接食肉加工・輸出業に参入させる方法がとられた点で違いが見られた。

* * * * *

第1報告は、外国人移民の流入というきわめてアクチュアルな問題をテーマにしており、その意味で米国の問題としてだけではなく、日本が現在直面しつつある問題との関わりからもさまざまな意見が寄せられた。また、後からきたマイノリティとしての外国人移民と同時に、元からいるマイノリティとしての先住民についても考慮すべきであるとする指摘もなされた。第2報告は、アルゼンチン現代史に題材を取った実証的な研究で、経済的従属のとらえ方や外交との関わりについて白熱した議論が展開された。(二村久則)

5. 学術・文化情報

○LASAアトランタ大会 多彩な発表で盛会

「風と共に去りぬ」で有名なアトランタでの第18回LASA国際大会に「日本・ラテンアメリカ関係」というパネルが設けられ、学会から数名の会員が参加した。発表者としては、G. アンドラーデ理事、恒川恵市会員(ワシントンD. C. のウィルソンセンター客員)、山岡加奈子会員(キューバ滞在中)、そして私の4人にすぎなかったが、フロリダ大学の客員となっている吾郷健二会員、神戸大学西島章次氏なども見かけた。

都心のPeachtree St. のWestin というホテルを会場兼宿泊所として、今回の学会は開かれ、年を追って盛会になる傾向にある。とくにフォード財団の協力で多くのラテンア

リカ人研究者が参加したこと、女性会員の比率が高まっていることが注目された。LASAの内部にBRASA (Brazilian Studies Association) という地域研究団体を作る試みが表面化したことも重要な変化の一つであった。

使用言語は、主に英語だが、スペイン語は第2の公用語であり、ポルトガル語の発表も少なかった。のべ約450のパネルが開設され、恒例のブック・セール(36スタンド)、グラン・バイレも好評であった。

今回は、ペーパーの配布方法が変わり、3回にわたって配布されたリストに記入して、1点1〜7.5ドルの価格で買う方式になった。プログラムの表紙と同じデザインのTシャツ販売、終身会費免除を賞とした1枚5ドルのクジ、寄付金募集など費用集めの努力も注目された。

論題の中では、市場経済化と改革、キューバ、ハイチなどのカリブ海・中米、女性ないしジェンダー関係、環境、都市、労働、NAFTAないしWHFTA、人権、冷戦後の国際関係など、およそ考えられるトピックがカバーされ、アメリカ大陸におけるラテンアメリカ研究の傾向と水準を知るまたとない機会であることは確かである。日本ラテンアメリカ学会内のLASA会員が130名近くになっている現状を考えると、数十名の日本からの参加者が望ましかった。(山田睦男)

○研究プロジェクト紹介

「ラテンアメリカとアジアの構造調整の比較研究」(筑波大学文部省科学研究費国際学術研究、平成4-6年度)

国内の研究分担者は細野昭雄、今岡日出紀、中川文雄、Neanthro Saavedra、山田睦男。主な目的は、①過去20年間の両地域の社会経済開発の戦略の特質を明かにし、②二つの戦略の比較を可能にする分析の枠組みを発展させることである。

主な研究対象の地域として、ラテンアメリカからブラジル、チリ、メキシコ、アジアから韓国、インドネシア、マレーシアを取り上げ、副次的にアルゼンチン、ボリビア、エクアドル、シンガポール、台湾およびタイを考慮の対象にしている。

調査は、次の方法で進めている。①国内分担者の面接調査および資料収集のため上記の

国々への訪問、②主な地域の研究分担者との密接な連絡、③学内での調査研究。昨年秋から筑波大学内で定期的に研究会を開いており、本年末には国際シンポジウムを開催し、年度内の執筆によって調査を完成させる予定である。

○日本学術振興会サンパウロ研究センター
派遣研究者に丸山浩明氏

日本学術振興会はこのほど、同会サンパウロ研究連絡センターの派遣研究者に金沢大学教育学部の丸山浩明助教授を決定した。派遣は本年8月から95年10月までで、この間丸山会員は、「ブラジルにおける熱帯環境の異質性とその補完的活用に関する地域生態学的研究」をテーマに自分の研究を行うほか、同センターが進める学術交流の業務を行う。

同研究センターは、ブラジルを中心に南米地域全体を担当しており、学術情報の収集やわが国学術情報の提供、ブラジル国家科学技術開発会議などとの学術交流、日本人研究者への支援などを主目的にしており、同センター派遣研究者としては、丸山会員は4代目である。

○ヴェネズエラ文学の研究誌発行

米国ミネソタにあるHamline UniversityがVenezuelan Literature & Arts Journalと題する研究誌を発行することになり寄稿を募集している。使用言語は英語ないしスペイン語で年1回の予定。問い合わせは、Venezuelan Literature & Arts Journal, Hamline University, Mail Stop 50, 1536 Hewitt Avenue, Saint Paul, Minnesota 55104-1284 USA

6. 近着会員業績

〔抜〕櫻井敏浩「ブラジルにおけるコロール大統領弾劾の意味するもの — 新しい政治文化の幕開けか？ それとも無血政変にすぎなかったか？ —」（海外経済協力基金『調査季報』№78、1993年6月）

〔抜〕同上「ラテンアメリカ事情参考図書リスト(I)~(VII)」（『ラテンアメリカ時報』№2~№7、1992年2月~11月、ラテンアメリカ協会）

〔冊〕青木芳夫訳「エドモンド・オゴルマン著『アメリカは発明された(3)』」（ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ』

第25号、1993年10月）

〔抜〕石井陽一「メキシコ憲法第27条の改正とその背景」（慶応義塾大学法学研究会編『法学研究』第66巻第10号、1993年10月）

〔抜〕加茂雄三「ラテンアメリカ — 周縁化か再生か」（『講座・世紀間の世界政治 第4巻 国際地域における秩序変動 — 比較のダイナミズム』日本評論社、1993年12月）

〔籍〕小池洋一共編『ラテンアメリカシリーズ2、ラテンアメリカの経済』（新評論、1993年）

〔抜〕青木芳夫訳「アメリカは発明された — イメージとしての1492年 — (4)」（ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ』第27号、1994年1月）

〔抜〕真鍋周三「マテオ・ガルシア・プマカウアの軌跡 — 植民地時代末期ペルー社会の考察 —」（奈良大学『奈良史学』第11号、1993年12月）

〔抜〕山脇（田島）千賀子「日系ペルー人の食生活にみるエスニシティ—リマとプカルバの比較研究」（日本生活学会編『生活学1993』ドメス出版、1993年）

〔抜〕田島久歳「南米パラグアイ歴史紀行 — ラテンアメリカ南部地域におけるイエズス会設立先住民教化コミュニティ — (1)」（『歴史と地理』第459号、山川出版、1993年11月）

〔抜〕古山英二「ブラジル、メキシコ出張報告 — その2 経済危機の克服と新メキシコ経済の建設 —」（三井物産貿易経済研究所『THE COMPASS』1993年4月）

〔抜〕同上「メキシコ：マキラドーラからNAFTAへ」（同上、1993年11月）

〔抜〕同上「ラテン・アメリカにおける自由貿易協定の動き」（同上）

〔抜〕同上「NAFTAの発効とラテン・アメリカ貿易の展望」（同上、1993年12月）

7. 事務局から

1) 寄贈図書

〔冊〕『ラテンアメリカ・レポート』Vol.10 №3、№4（アジア経済研究所、1993年9月、12月）

〔籍〕*Suplemento Antropológico*, Universidad Católica, Revista del Centro de Estudios Antropológicos, 1993.

〔籍〕『'92年度国際シンポジウム講演記録

集 — 二つの世界の遭遇 — 』（京都外国語
大学〈スペイン語圏 国際シンポジウム〉実
行委員会、1993年11月）

〔冊〕『ラテンアメリカ文献目録 — 1991年
— 』（上智大学イベロアメリカ研究所、
1993年12月）

2) 新入会員（第64回理事会承認）

編集後記

本来だと2月末発行予定の会報だが、大会
準備のニュースを載せたい、研究部会の報告
も載せられないかと考えているうちに1カ月
遅れの発行となってしまった。会員諸氏には
申し訳なく思っているが、遅れたお陰(?)で
動きのある会報になったかと思う。

学会の国際化にともなると是非とも欲しか
ったロゴが決まり、本号からもこの地味な会
報の表題を彩ることになった。また会員400
人突破の現状に合わせるべく小委員会が検討
してきた会則・理事選挙規則の改正案もま
まり、次回の大会の議題となる見通した。

さらに3度目となる学会の名古屋大会での
発表は、8部会28研究発表と大会組織委員会
が喜びの悲鳴をあげるほどの盛況ぶり。若手
研究者の発表が目立つようだが、LASA（米
国ラテンアメリカ学会）アトランタ大会から
は出席した山田理事長から、「もう少し会員
の出席が増えるといいのだが」といったF A
Xが寄せられてきた。

政治状況が大きく変わりつつあるにもかか
わらず、国際社会の中で居場所の見つからない
日本の姿をみるにつけ、地域研究の地道な
積み重ねが必要だと痛感する今日、変化のみ
られる会報の編集は編集委員の喜びとする
ところだ。（堀坂浩太郎）

* * * * *

次号（5月末発行予定）には「近著紹介」
を載せる予定ですので、掲載を希望する諸氏
は堀坂、飯島までご連絡を。千葉、山岡編集
委員は現在それぞれチリ、キューバにいます。

No. 48 1994年3月31日発行
〒466 名古屋市昭和区山里町18番地
南山大学外国語学部イスパニヤ科
山田睦男研究室内
日本ラテンアメリカ学会事務局
☎ 052-832-3111